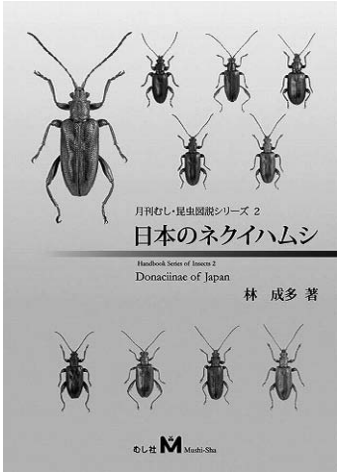
書評

「日本のネクイハムシ」
月刊むし・昆虫図説シリーズ 2
林成多著　95 pp.　定価 6,400 円 + 税
（有）むし社　2012 年 9 月 20 日発行

実に美しい本で，日本のネクイハムシ相のみならず世界のそれも概観できる．内容に入る前に，光沢とともに繊細な彫刻をもつ昆虫を，カメラの影を最小限に抑えて見事に描き出した，むし社の最高水準の撮影技術には，ただ感心するほかない．大手出版社がプロのスタジオ写真家に依頼する一般向けの図鑑と比べても，技術の差は歴然としている．

美しい原色図を伴った図鑑というものはプライヤーや宮嶋幹之助の頃からあったけれども，その後は講談社の大図鑑シリーズに見られるように，大型化が顕著だった．近年では野外への携帯を意図するため，特に小型化・軽量化が著しく，以前のように書棚に入りきらないようなものは少なくなったが，それは採集を前提としない，「昆虫は野外で眺めるもの」という大衆化によって方向づけられた部分が大きい．そのような流れのなかでは，この本は机上に広げて室内で眺めることを意図してあり，どこまでも「虫屋」の本である．写真をある程度の大きさで眺めるには，やはり A4 判ぐらいの大きさがあったほうがよい．時代のなかで電子媒体化が進むなかで，おそらくこれは，出版という形式のなかでは最終形になるのではなかろうか．



ネクイハムシといえば，火付け役となったのは何といっても日浦勇をはじめとした野尻湖昆虫グループによって出された「アトラス・日本のネクイハムシ」だった．日浦の没後まもなくアトラスが出たときには，ある同好会誌に「よい本だけれども，あの展足のまずさは何とかならなかっただろうか」と書評を書いた人がいた．評者も含め，多くの虫屋が同じように受け止めただろうが，日浦らは昆虫を通した地史の解明に徹し，美しく整形してズラリと並べて悦に入るというような「虫屋の余計な喜び」を捨てたからこそ，オサムシからカンアオイ，フキバッタやヤブキリに至るまでの多分野での仕事ができたともいえる．

数年後，今度は虫屋の視点でネクイハムシ研究会が活動を開始した．こういう会が盛り上がるには何か劇的な発見を伴うことが多いが，この場合は北関東から南東北が舞台となっていた．野尻湖グループは関西から北陸道を通って東北地方の調査に入ったため，素通りした関東はすっぽりと空白地帯として残っていたし，まさかそこでアカガネネクイハムシのようなものが発見されようとは誰もが想像しなかったに違いない．

そうしたアマチュアレベルでの活動も，ひととおりの種類の発見とそれぞれの分布解明という大きな目標を終えたあとは大きな盛り上がりもなくなり，幼生期に特化した成田行弘や，化石から時間軸にアプローチした林による，専門家としての研究が進んでいった．そのなかで，ネクイハムシ研究の第三期とでもいうべき，様々な隠蔽種の発見が相次いだことは，林が分類学ではなく古生物学の専門家で，解剖して隅々まで形態を比較することを習慣にしていたことと無縁ではあるまい．

本書は，そうした調査研究の流れが成熟期を迎えたことを示すものである．アマチュアがいきなりには手を出しにくい部分についても，調査方法や付図の項で，情報が必要最小限かつ平易に載せられており，今後は本書が，かつて「アトラス」がネクイハムシの同好者に果たしたのと同じような役割を，広く別の分野の人に対して果たすことだろう．

さらに，ネクイハムシといえば，和名に関しても例えばスゲハムシとキヌツヤミズクサハムシ，あるいはキアシネクイハムシとトミナガネクイハムシなど諸説が入り乱れていたグループでもある．著者は野尻湖グループの出身だが，決して親しい人脈の意見に偏ることなく，安定して使用されてきたものを公平に選んでいることが目にとまった．過去に使われてきた様々な和名を拾い出しては整理していた長い努力は折に触れて垣間見ていたが，権威や人間関係にとらわれることのな

い著者の姿勢を表しているものと思う．

なお，せっかくなので申し添えれば，ツヤネクイハムシなどは美しい青色型がいるのだから，使い古した十円玉のような色彩の標本が並ぶページでこそ，彩りを添えて欲しかったし，むし社の撮影技術なのだから，展足も「非の打ちどころのない完璧なもの」で決めてほしかった．そして，海外でのとびっきりの採集品を著者にもったいぶって提供した身としては，産地と採集者名もぜひ入れて欲しかった．が，それらは後世の大多数の人には関係のない，虫屋の趣味的な要望にすぎず，そうした余計なものをバッサリと捨てる気持ちが持てたからこそ，本書は洗練された作りになっているともいえる．虫屋の「余計な部分」からどこまでも離れられない私には，これからもただ箱に並べた標本を眺めて悦に入りながら，中堅となった同世代の友人らが世に送り始めたすぐれた仕事を机上に広げつつ，偉そうに他人の成果を評することぐらいしかできそうにない．

（永幡嘉之）

文献紹介

Jäch, M. A. and J. A. Díaz, 2012. Descriptions of six new species of *Hydraena* s. str. Kugelann from Japan (Coleoptera: Hydraenidae). Koleopterologische Rundschau, 82: 115–136.

日本産 *Hydraena* 属（ダルマガムシ科）は故佐藤正孝博士やウィーンの M. A. Jäch 博士らの研究によって 14 種が知られているが，上記論文によって *Hydraena* 亜属に属する 6 種が本土より新種として記載された：*H. curvipes*, *H. hayashii*, *H. kamitei*, *H. kitayamai*（以上が *H. notsui* group），*H. kadowakii*, *H. tsushimaensis*（以上が *H. riparia* group）．さらに，*H. notsui*（シコクダルマガムシ）が鳥取県と島根県から記録された（本州初記録）．

H. notsui group は体長 1.4–2.0 mm の小型種で，*H. riparia* group は体長 2.1–2.5 mm でより大型である．いずれも山地の渓流や細流で採集されている流水性種である．流水性 *Hydraena* 属は，一般に生息密度が低く，大量に採れることは少ない．これだけの新種が発見されたのは，近年のヒメドロムシ・ブームの副産物とも言えるだろう．また，流水性 *Hydraena* 属は日本列島の広い範囲で多くの種に分化しており，日本産水生甲虫の中でも特異な存在である．さらに，未記載種の発見も大いに期待できるという魅力もある．

著者らは日本人ではないため，新種に和名がない．既知種のリストと合わせて和名の提唱も行っておく．

Hydraena notsui group:

Hydraena notsui Satô, 1978 シコクダルマガムシ（島根県，鳥取県；四国）

Hydraena chifengi Jäch et Díaz, 1999 メンノキダルマガムシ（愛知県）

Hydraena yoshitomii Jäch et Díaz, 1999 ヨシトミダルマガムシ（埼玉県）

Hydraena curvipes Jäch et Díaz, 2012 アシマガリダルマガムシ［和名新称］（長野県）

Hydraena hayashii Jäch et Díaz, 2012 クニビキアカダルマガムシ［和名新称］（島根県）

Hydraena kamitei Jäch et Díaz, 2012 アカダルマガムシ［和名新称］（岐阜県，栃木県）

Hydraena kitayamai Jäch et Díaz, 2012 ジゴクダニダルマガムシ［和名新称］（大阪府）

Hydraena riparia group:

Hydraena riparia Kugelann, 1794 ホソダルマガムシ（北海道；群馬県，長野県，岐阜県）

Hydraena watanabei Jäch et Satô, 1988 ワタナベダルマガムシ（青森県，宮城県，山形県，山梨県）

Hydraena kadowakii Jäch et Díaz, 2012 ダイセンダルマガムシ［和名新称］（鳥取県，岡山県）

Hydraena tsushimaensis Jäch et Díaz, 2012 ツシマダルマガムシ［和名新称］（対馬）

今回の論文が日本産ダルマガムシ科の解明が進むための起爆剤になることを期待したい．

（林　成多・上手雄貴）